

---

『物流 Weekly』連載原稿

『日本ロジファクトリーの物流ケース・スタディー』

“社長！それは違います！” 第91回

---

<タイトル>

「猛暑と物流現場」

<本文>

皆さんも周知の通り、今年は歴史的な猛暑であった。この異常気象は世界レベルで起こっているという。これも地球温暖化の現れであろうか。猛暑となれば当然、物流現場の作業も過酷なものになってくる。しかし、猛暑でなくとも夏の物流現場はそもそも過酷なものである。

そのため、この過酷な現場に耐えることのできないドライバーや倉庫スタッフは、決まったようにお盆前の繁忙期の後に辞めていくという傾向がある。この時期にしっかりフォローを行うというのもひとつの手であるが、これらに耐えることのできない現場スタッフは、次の真冬か来年の夏に再び「辞めたい病」が発生する。そもそも「その現場には向いていない」ということになるだろう。

今まではこのような考え方で「仕方がない」と割り切っていた現場でも、この人手不足の時代、その考え方を大きく切り替えなければならないようだ。働く人たちの環境整備という点で「空調」の問題は各社が真剣に議論するようになった。せっかく確保した人材なのに、暑さ・寒さを理由に辞められたのではたまったものではない。パート・アルバイトが働く倉庫やセンターでは、「空調完備」という現場が増えた。私がドライバーであった頃は「ブロック内で売上3位までに入ればトラックにクーラーを付けてやる」と言われ、それが嬉しくて頑張ったものだが、いまどきそんなことをやっているドライバーは続かないし、集まらない。

ある輸出貿易会社の現場ではコンテナのバンニングを行っており、特殊なノウハウが必要であったため、物流業者に任せず自社で対応している。この会社の本社1階には専用ヤードが2本設けられており、20代半ばのスタッフが腕まくりをして業務を行っている。責任者から話を聞くと「月間120本のバンニングが目標となっている」という。休憩時間も昼の1時間以外に3時30分?同45分の休憩を設けているが、退職者が後を絶たないという。なぜ辞めていくのか。その具体的な理由を聞くと、「毎年、夏の暑さに耐えられず辞めていくスタッフが多い」という。そのことから、私は「せめてエアダクトを設置すべきである」と勧めた。後日、その管理者から「現場のメンバーと話し合っ てエアダクトの設置は作業の邪魔になるとのことでクールベストを購入することになりました」と報告を受けた。また、「会社が我々の事を考えてくれていると現場は喜んでいました」とのことであった。

「暑さ対策」は「定着率対策」ともいえるこれからの物流現場。皆様の会社ではどんな対策を考えておられますか(トメ)

---